噂のげぇむ

夢幻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
噂のげぇむ

【Ｎコード】
Ｎ９８３６Ｖ

【作者名】
夢幻

【あらすじ】
４人は、そのゲームを始めるとその人は取り込まれるという噂のゲームを始めてしまった。そのゲームの中は古びた館だった……。

とある脱出ゲームと漫画とよんで思いつきました、残酷描写はあるかは、自分にもわかりません。

1PLAY（前書き）

途中から書き方が一人称から三人称に変わります

1PLAY

俺の名は靖晴（やすはる）、今は、金曜日の放課後だ。
「おーい、待ってよー。」
「そんなこと言わなくても、待ってるよ。で、何の用？」
「明日、みんなで家に行っていい？新しくゲーム、ダウンロードしたから。」
（明日か、何にも用事はないし、まあいっか。）
「うん、いいよ。」
「やったー！じゃあまた、明日、みんなで行くねー。」
「じゃあ、明日。」

次の日……。

午後1時くらいに、みんなが来た。
「おじゃましまーす！久しぶりだな、お前の家に入るの。」
俺の家に来たのは、稚夜（ちよ）、亮汰（りょうた）、舞苛（まいか）、の3人。
「そうだな、何年ぶりだ。お前等を家に入れるの。」
「私にはわからないよ、初めてなんだし。」
「あれ、そうだっけ？この前みんなで来なかったけ？」
「私、半年前に転校してきたんだよ！行ってるわけないじゃん！」
「おい、今日来た理由は、なんなんだよ。いい加減教えろよ。」
「ふっふっふー、実はあの噂の呪いのゲームをダウンロードして持ってきたのだー！」
「え！嘘！まじで、あの遊んだらそのゲームに取り込まれるって噂の！」
「そう！みんなでやらない！」
（すごくいやだ……。帰りたい、って、ここ俺の家……。）
結局、みんな俺の部屋でそのゲームをやることになった。

「じゃあ、始めるよー。」
カチッ
「……なーんだ、なんにも起こらない…ってえぇ！ここ、どこ！」
俺たちは、気が付くとまったく知らない場所にいた。
「ん？どうかしたって、どこだここぉ！」
みんな、まったくどこかわからないところに来たので、吃驚していた。
「ったく、何処なんだ、ここ。」
「靖晴、お前も知らない所か。稚夜と舞苛は？」
「わからん。気が付いたらここにいたから。」
（なんなんだ、ここ。）
俺は、亮汰と一緒に館の中を探索することにした。

「いたたたたー、ん、ここはどこ……？ねぇ、舞苛～、何処～。」
「稚夜～。ここにいるよー。ねぇ、これ、なんだと思う？見えないからわかんないよー。」
「あっ、ちょっと待って、今ライター出すから。」
「早くしてよー、怖いんだから。」
ボウッ
「ひっ！なにこれ、ま、まさか、こっ、これって、し、死体！」
「え！嘘！死体！ふざけないでよ！ここってなんなのよ、絶対靖晴の家じゃないでしょ！早く帰してよ、今日塾があるのに！」
「多分無理だと思うよ。」
「なんで？」
「この部屋から、外に出る扉はあるけど、まったく動かないんだよ、出られないよここからじゃ、だから、早く出る道探そうよ、もしかしたら、その途中で、靖晴や亮汰に会うかもしれないし。」
「そうだね、早くここから、出る道さがそう。」
「おー！」

舞苛と稚夜は館を探索することにした。

「なあ、亮汰。ここなんか暗くない？周りには灯篭みたいなのがぶら下がってるだけだし。」

「だな。懐中電灯ぐらい落ちてたらいいのにな。じゃあ、一つこれもらっていくか。」

亮汰はぶら下がっている灯篭を持ち上げた、すると。

ゴゴゴゴゴゴゴッ

「ん、なんか、動いたような音がしたぞ。何かわかるか、靖晴？」

「あ、ああ。多分あれだ。前の方で何か、動いたから、ちょっと見てくる。」

「気をつけろ、こんな仕掛けのある所だ、トラップが仕掛けられているかもしれない。」

「わかってるって、じゃあ行ってくる。」

靖晴は、仕掛けで動いた場所へ向かった。

「ねぇ、これなんだと思う？」

「わかんない、とりあえずもっていこ。」

ガコッ

「何、今も音。ねぇ舞苛、って舞苛！何処！何処行ったの？ねぇ舞苛～！」

舞苛は仕掛けによってできた穴へ落ちて消えて行った。

稚夜は何も知らないまま舞苛を探しに館の中を進んでいった。

「やっぱり暗いな、ここ。早く行ってあいつの所に戻ろう。」

（長いな、この道。いったいどれだけあるんだ？）

「うわぁぁぁぁぁぁ！！！」

「どうした、亮汰！」

「と、突然、床に穴が開いて、そこから頭と下半身の無い人間が追いかけてきたんだ！」

「変な嘘言うな、怖がらせようとしても無駄だぞ。」
「嘘じゃねぇ！早く逃げるぞ！」
「おいっ、引っ張るんじゃねぇ！なんなんだいきなり！」
靖晴と亮汰は見えない道を走りぬけて行った。

「いた～い！もう、いきなりなに！ってここはどこ……？」
（何も見えない、灯篭も見当たらないし、ライターはえーとあった。）
ボウッ
「ひっ！骨がいっぱいある！もういや、帰りたい、って、あれは何？なにか光ってるけど、『2階の鍵』？なにこれ、一応持っていこう。でも、どうやって出よう……。」
（ここから落ちてきた所しか光が見えないし、他の道はあるかなぁ？）
舞苛は帰る道を探して明かりをつけて行った。

「舞苛ー！どこいったの！」
（突然消えた舞苛は消えちゃうし、靖晴や亮汰はまだ見つからないし、みんな何処行ったんだろう…）
「ここかなぁ？もう、他に見つかりそうな所ないし。失礼しまーす。」
ガシャアン
「ひゃぁ！なにいきなり！」
「う、ううぅ、がぁっ！」
「きゃぁ！何か来た！人……？って頭が無いぃぃぃ！！いやぁぁぁぁぁぁ！」
舞苛は何も見えない真っ暗な道を頭の無い人から逃げていくのであった。
このゲームに取り込まれた4人はどうなるのか、それは誰にもわか

らない……。

1PLAY（後書き）

何とか続かせるつもりです。

2PLAY（前書き）

遅れました、すいません！

2PLAY

……我は、ここを支配するものなり。汝、ここに挑戦するのならば、仲間を信じ、誰も失うな、皆を守り、ここから出る道を探すがよい。……

「何だったんだ今の……。」
「ん？どうしたんだ、靖晴？」
「いや、突然頭の中で声が聞こえたんだ。」
「ふーん、なんて言ったんだ？」
「えーっと、確か誰も失うなとか、そんな事言ってた。」
「と言う事は、ここはまったく別の場所になるな。早くこんな所から出ないと……。」
「で、どうする、これから。まだあいつ、いるだろ。ここに隠れてるけど、どこに逃げるんだ？」
「さぁ？まずは、あいつが遠くに行って、そのあと、あいつが出てきた穴の方に行ってみるか。」
「そうだな、今はそれしか思い浮かばないし。」
靖晴と亮汰は、頭と下半身の無い人から、隠れながら、次にすることを決めていた。

「本当に何にも見えない……、ここから出れるのかなぁ？」
（舞苛はどっか行っちゃうし、亮汰と靖晴は、見つからないし、みんなどこ行ったんだろう？）
「舞苛ぁ～！何処言ったの～？いたら、へんじしてー！」
ガシャァン
「うひぃっ！なんだ……、ただの骨かぁ、ってなんでこれを見て落ち着いてるのかしら…？」
（それにしても、ここ、なんにもないなぁ……。周りは真っ暗だし、

さっきみたいに何にも落ちてないし、早く、見つけてかえりたいなぁ。）

稚夜は、舞苛を探しながら、自分の感覚に悩んでいた。

「えぇーっと、私はあの穴から落ちてきてこの鍵をひらったんだけど。周りに道は無いし、梯子もないっ！さぁてどうしようか……、多分二階に梯子かなにかあると思うんだけど、どんどん稚夜の声は遠くなるから、ここの近くには稚夜はいないし、……よじのぼるかっ！無理だな、突起がまったくない……、誰か、来ないかなぁ？」

舞苛は、落ちた穴の中で、これからを考えていた。

「なぁ、もう行ったか？」

「わからん、俺からは見えん。」

「そうか、じゃあ、気のせいに見えるものは現実の可能性があるんだな。」

「どうしたんだ？」

「上に、さっきのゾンビがいるんだが、あれは、本物なのか？」

「……あぁ、本物だ、俺も見えてる。」

「キャシャァァァァァァ！！！」

「「うぎゃぁぁぁぁぁ！！！」」

「早く出てくれ！頼む、死ぬから！」

「そんな事言わなくても、出ようとしてるよ！ちょっと待て！」

「おまっ、待てるか！逃げるぞ！」

「ちょっ、いきなりすぎるだろ、話の展開がぁぁぁl！！」

「おまえ、誰に言ってるんだ！？そんなこと言ってる暇があったら、逃げるぞ！」

靖晴と亮汰は、突然現れたゾンビから、逃げていた。

「本当に何処探してもいないなぁ～、よしっ、帰るかっ。」

（もしかしたら、さっきの所にいるかもしれないし。）
「で、どの道だっけ……、なんか道増えてるんだけど？まぁ、何処でもいいかっ、早く帰ろーっと。」
稚夜はさっき来た道とまったく違う道を走って進んでいった。

「「うわぁぁぁぁぁぁ」」
「あっ、この声、亮汰と靖晴だ、おーい！」
「逃げるぞ！」
「おうっ！」
「何から逃げてるのかあなぁ？あっ、今ので何か、落ちてきた。梯子かな……って、スコップ！ここを掘れって事……、無理だよね、たぶん地下三階ぐらいの深さだよ、掘りきれる自信がない……。」
舞苛は、することを見つけたが絶望に浸っていた。

「まだ、追ってくる、どっか隠れる場所はねぇのかよ！」
「それが無いんだなぁ。結構探してるけど、いろんな部屋行って見ながら逃げても、そんな所無かったろ」
「じゃあ、倒すか！」
「どうやって、倒すんだ、あんな化け物！」
「うーん……素手？」
「無理に決まってるだろーが！」
「そうか？２００人ぐらいいたらいけると思うんだが？」
「そんなに人いるかぁ！いるのは、２人だけだぞ！どうやって増やすんだ！」
「もしかしたら、あの２人も来てるかもしれないよ？」
「それでも、４人だろーが！」
「あ、そだね、足んないね。他に誰か呼ぶ？」
「呼べたら、呼んでるわぁぁぁ！！」
「じゃあ、武器探す？」
「もう、それしかないの……。」

靖晴と亮汰はゾンビに追いかけられながら、馬鹿なことしていた。

ガスっガスっ

「結構掘ってるとは思うんだけど、まったく進まない……、やっぱりこれで出るなんて無理なんだよ……、」

ガインッ

「ん？なんか、あたったぞ、やった！宝箱っぽいものだ、あーけよっ！」

がちゃ、

「なにか書いてある、なんだろ？『かなとぎむわやんどれまなぬかないにきりぢっすょてせれちもないになびすゃわあすおやえちぢすさなともぬひぼてなだえげぎふてやえぢ、ぢろきぬちなんどとてぢっとまりお。ヒント→』……なんだこれ？意味がまったく分からない、まずこれ日本語……？」

舞苛は、手に入れたものをじっと見つめていた。

「あれ、こんな道通ったっけ……？まぁいっか！」

カチッ

「ん？何の音、これもしかしてなにかいらないことしたっぽい？やっぱり下穴あいてたぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……。」

稚夜は、トラップに掛かり、穴の中に落ちていった。

このゲームに取り込まれた４人はどうなるのか、それは誰にもわからない……。

2PLAY（後書き）

多分、暗号ミスってると思います。

3PLAY（前書き）

ホラーじゃなくなってきましたが、読んでください！

3PLAY

「さーて、また、隠れてるけど、これからどうしようか、亮汰。」
「どうしようかじゃ、無いと思います。武器でも探そう。」
「武器がありません。」
「棒がありました。どうすんだ？」
「改造しよう。」
「そうしよう。そして、逃げよう。また、見られてる、しかも、増えてる。」
「そうだな、逃げるか。」
「本当にここは、どうなってるんだ？だいぶいろんな部屋に行ったけど同じ感じの部屋しかなかったし、行ってない部屋なんかあったか？」
「これから、探そうってあった。」
「何処にあんの？」
「最初の所に玄関があったろ、そこの隣の部屋。そこから、みんなバラバラになったから、その部屋には行ってないだろ。」
「そういや、そだね。今から行くの？この、４０体に増えたよくわからない者に追いかけられてる状況で？」
「その状況で思いついたし、必死に逃げてる間に忘れると思うから、行くぞ。」
「いいけど、道無いぞ、この先。」
「まじでっ！？ってか、なんで、知ってるの？」
「何回目だと思ってるんだよ、この道来るの、今の入れて９回目だぞ…。」
「そんなに来たっけ？まぁいいや。逃げるぞ！」
靖晴と亮汰は目的地を決めながら、逃げていた。
「……いたた、落ちちゃったけど、ここはどこだろう？とりあえず

狭い…。」
横に腕を伸ばすこともできない、しゃがむことはできるぐらいの隙間はあるけど。
「ん？何だろう、この紙、えっと『moon introduce glad island dinner ones nose alreadyriver interesting world only hour over rain ever ヒント最初』なにこれ、意味不。まず、日本語じゃない。」
稚夜は、手に入れた暗号とにらめっこをしていた。

「今、訳が分からないものが書いてある紙を見つけたけど、意味が分からない。『かなとぎむわやんどれまなぬかないにきりぢっすょてせれちもないになびすょをあすおやえちぢすさなともぬひぼてなだえげぎふてやえぢ、ぢろきぬちなんどとてぢっとまりお。ヒント→』ってなに！？ちゃんとした文になってないし、→の意味も分からないし。」
これをどうやったら、読めるようになるんだろ。紙の上には何にも書いてないし…。
「どうしよう…まったく分からない、他にヒントは……無い。」
どうしたら、いいんだろ。→の意味は多分、上にずらすって事なんだろうけど、ずらすのもわかんないし、どうしよう。
「よしっ！やーめた！早く掘って出よ。」
って思ったのは、良いけど、掘る道具が無いんだった。
「頑張って解かないとな。」
えーと、ローマ字にして上になる文字は……、意味が分からなくなる。
「他になにか、ないの～？箱になんかあったかな？ん、箱に何か彫ってある。これは、５０音？」
これを見て解くってこと？ん～……あっ、わかった。」

舞苛は、見つけた暗号の謎を解いていた。

「まだ、撒けてないのか。今で、何体残ってるんだ？」
「多分３０体ぐらい、帰るか！」
「無理だよ！どうやって帰るって言うんだよ！言ってみろ。」
「玄関を開けたらいいんじゃね！」
「それをやるって言うのか。」
「当然やるのは、靖晴だけどな！」
「なんで、俺！？」
「ただ単に、俺が玄関を開けるのがいやなだけだから！」
「馬鹿か、お前は！って見つかったぁぁぁぁ！！」
「お前が騒ぐからだろ！」
「お前が騒がせるからだろ！早く逃げるぞ！玄関の隣の部屋まで！」
「いってらっしゃーい。」
「お前もくるんだよ！」
「はいはい。」
靖晴と亮汰はゾンビからいまだに逃げ回っていた。

「とりあえず、この暗号を解かないと先に進まないんだろうな。まずは訳してからその最初の文字をつなげると、『月、紹介する、うれしい、島、夕食、１回、鼻、すでに、川、面白い、世界、ただ一つ、一時間、上に、雨、今までに。』で、これの頭文字を繋げると、『つしうしゆいはすかおせたいうあい』日本語になってないから、これは間違ってる……、ダメだ、まったくわかんない。」
　他の解き方って何があるんだろ…？頭文字……分かった！こう読んだらよかったんだ！
稚夜は見つけた暗号の解読に挑戦していた。

「この暗号の文字を、一つずつ上にずらせばいいんだ！ん以外の文字を『い→あ』のような感じで！だから、これを読むと『このてが

みをよんでるものにこのあなからだっしゅつするためのあなのばしょをおしえよう、ただしそのためにはべつのどうぐがひつようで、だれかに　たのんでてつだってもらえ。』だから、文字を合わせると『この手紙を読んでる者にこの穴から脱出するための穴の場所を教えよう、ただしそのためには別の道具が必要で誰かに頼んで手伝ってもらえ。』って待たないといけないの！あぁ～せっかく解いたのに、特にすることが無いなんて……はぁ。」

舞苛は暗号を解いたが落ち込んでいた

　このゲームに取り込まれた４人はどうなるのか、それは誰にもわからない……。

3PLAY（後書き）

間違えていた暗号は直しました

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9836v/

噂のげぇむ

2011年10月25日20時01分発行